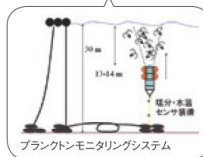




壊滅的な被害を受けた独立行政法人水産総合研究センター東北水産研究所の宮古庁舎も再建。被災地復興のための研究開発に取り組んでいる



サケのエサとなる海中のプランクトンを測定する「プランクトンモニタリング用多周波ソナー」



津波でふ化場が壊滅、生き残った稚魚も未成熟な状態で放流すること……

青森岩手・宮城・三県の漁業では、サケが重要な地位を占めており、漁業生産額のおよそ8%に達しています。そんなサケ漁を支えているのは、漁業協同組合等が運営する「さけますふ化場」による「さけます

東日本大震災からの
復旧・復興に向けて

新技術「プランクトンモニタリングシステム」で、震災で激減したサケ漁獲量の回復を

東北漁業の復興を、調査・研究で後押し

aff 1 January 2015
平成27年1月1日発行
(毎月1日発行)
あふ CONTENTS

- 2015新春座談会
見直したい、伝えたい お米の魅力
- 東日本大震災からの復旧・復興に向けて
独立行政法人
水産総合研究センター東北水産研究所
- 特集1
新しい可能性もいっぱい
やっぱり、お米が好き!
- チャレンジャーズ トップランナーの軌跡
山梨県 株式会社サラダボウル
- 特集2
食文化研究者・清 純の
味わい ふれあい 出会い 旅
第8回 / 新潟県上市「鮭の焼漬け」
- MAFF TOPICS
「フード・アクション・ニッポン
アワード2014」が開催されました
- 読者の声 /
農林水産省とれたてニュース
2015年ミラ / 国際博覧会

表紙: © iarc image gallery/arnamimages

広報誌「aff (あふ)」について
農林水産省や農山漁村は、食料の安定供給はもちろんのこと、国土や自然環境の保全、良好な景観の形成などの多面的機能の発揮を通じて、国民の皆さまの毎日の生活において重要な役割を担っており、また、農林水産行政は、生産などの現場に密着したものであると同時に、毎日の生活に深く関与しています。農林水産省では「aff」を通じて、農林水産に関心がある方々とのつながりや農山漁村の魅力、食卓や消費の現状などを紹介しています。

ホームページのご案内
「aff」は、農林水産省のホームページでもご覧いただけます。
<http://www.maff.go.jp/j/pp/aff/>



■編集・発行 農林水産省大官官報総務課広報室
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
TEL.03-3502-8111 (代表) FAX.03-3502-8766
<http://www.maff.go.jp/>

■編集協力 一般社団法人の光協会
〒162-8448 東京都新宿区西谷河原町11
TEL.03-3266-9045 FAX.03-3266-9046
<http://www.ienchikari.net>

メールマガジンのご案内
大目撃メッセージや施策の紹介、イベント情報などをあふで「農林水産省メールマガジン」を毎週金曜日に発行しております。ぜひご登録ください。無料です。
<http://www.maff.go.jp/j/p/e-mag/>

フェイスブック・ツイッターのご案内
Facebook: <https://www.facebook.com/maffjapan>
Twitter: https://twitter.com/MAFF_JAPAN

本誌に掲載した論文など、見えてくる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りします。

ふ化放流事業。サケの生まれた川に帰帰する習性を利用して、卵から稚魚を育て、毎年約6億匹を川に戻します。70年代以前には、同事業によるサケの帰帰率は1%以下



下でしたが、震災前は3%前後まで向上していました。

しかし、震災により状況は一変しました。津波により、3県に61か所あったふ化場のうち26か所が壊滅。生き残った稚魚も、例年より小さいサイズで放流せざるを得ませんでした。

平成24年以降、ふ化場は徐々に再建されたものの、サケの稚魚が成魚となつて帰郷するのは、おおむね放流から4年後。そのため、震災時に小さなサイズで放流した影響は、今年から大きく現れます。平成26年11月時点で、川で捕獲する採卵用のサケは、例年の2割減となっています。

独立行政法人水産総合研究センター東北水産研究所が所管する漁業資源研究センター長の堀井豊光さんは「卵が採れないと、放流する稚魚が少なくなり、長期的に漁獲量が減りかねません」と話します。

目標は、サケ漁業の生産性20%アップ!

サケの漁獲量を少しでも増やすために、センターでは、さまざまな技術開発に取り組んでいます。そのひとつが、海中のプランクトンの量を観測する「プランクトンモニタリングシステム」。サケの稚魚は、放流直後の体力消耗がもっとも大きく、そのとき、周囲にエサとなるプランクトンがどの程

度いるかが、生存率に大きく関わります。そこで、センターでは特殊なソナーを開発。音波を利用してプランクトンの大きさや数の増減を探り、最適な放流のタイミングを割り出すようにしています。また、放流した稚魚に、夜間にも光で集めた天然プランクトンを与え、摂餌能力が高まるように育てる「誘引保育放流」にも取り組んでいます。こうした新技術で、サケの帰郷率をアップして、漁獲量を大幅に増やしたいですね。最終的に、サケ漁業の生産性を20%アップするのが目標です」と、堀井さん。サケのふ化放流事業以外でも、漁業の復興を加速させる研究が進んでいます。大被害を受けたワカメ養殖では、定置網漁船を活用した大規模な「ワカメ刈り取り装置」などを開発。漁業者の作業時間やコストを、それまでの20%にまで減らしました。カレイの一種、高級魚「マツカワ」の種苗生産では、稚魚を緑色LEDの光を当てて育てることで、成長速度を従来より30%上げることに成功しています。「東北の太平洋沿岸では、震災前から漁獲量が減少していた魚種もあり、漁業者は追い討ちをかけられる形となりました。一日でも早く、これらの技術を実用化したいですね」と、堀井さんは力強く話してくれました。